読売歌壇

小池　光　選

障害の父をどこかで疎んじてた少年のわれ老いて悔やみぬ　大東市　若槻　豊彦

【評】父には障害があった。こどものころそれを恥ずかしく思い、疎んずる気持ちがあった。老境になって、いまわかる。父は一生懸命生きていたのだ、と。

五色沼旅行の仲間みな逝けり紅葉の記憶われに託して　ひたちなか市　新山　英輔

【評】会津の五色沼に仲良しの友達と旅行したことがあった、あれは楽しかった。一人欠け、二人欠けして、じぶん一人がいま生き残った。めくるめくような紅葉が思い出される。

真っさらのズボンを穿けば若返るような気がする元日の朝　小美玉市　松山　光

【評】新しい衣服に身をつつむと、よみがえったような気がするもの。ましてきょうは元日。今年はいいことがありそうな気がする。

あの頃に戻ることなき町並みに子供が一人はぐれてゐたり　大津市　竹村　哲男

来年の手帳に書いた通院日一年先まで生きねばならぬ　奈良県　松本　悦子

ベランダの花の安否が気がかりでスピードあげる旅の帰り道　鴨川市　長田　千愛

奥能登の故郷を離れて四十年帰って来てと雪の声聞こゆ　東京都　船木千代子

風無きに意志有るごとく黄葉は或る瞬間に枝を離るる　狭山市　奥薗　道昭

口癖は「寝るより楽はなかりけり」母の一生偲ぶ冬の夜　佐世保市　鴨川　富子

夕暮れの街で友だち手をふった「ぼちぼちのんびり」また歩き出す　鳴門市　楠井　花乃

栗木　京子　選

夫の持つスマホの画面に乙女おり昭和の色はまさかの私　君津市　菅又　久子

【評】夫のスマホを見ると女性の写真があるが、どうも画像や背景が古めかしい。それは若き日の作者なのだった。「昭和の色」が味わい深い。起承転結が見事に決まった歌。

豪雨禍の輪島で一日ちから出し痛めた肩が記憶を留む　日野市　那須　真治

【評】ボランティアとして輪島に行ったのだろうか。もっと役に立ちたかったという悔いが伝わるが、それは被災地を忘れないという決意でもある。結句が揺るぎない。

早口で早足で早飯で吾は誰と戦い誰を追い抜く　福山市　石原　析子

【評】作者は何事も手早く実行したい性格なのだろう。早口、早足、早飯に力が溢れている。下句の対をなすリズムも歯切れ良い。

真夜中の戒厳令で目が覚める近くて遠いお隣の国　横浜市　高野　令子

おぼつかなき歩みなるらし若きらにいたはられつつ喪主の座につく　小金井市　小林　良美

公園の注意事項をじっと見て平仮名ひろう三歳児の目　東京都　岸浪　三蔵

広報に蓮根掘りのイベントが載れば今年もあと一週間　明石市　小田　慶喜

家具ずらし掃除をすれば去年まで居た犬の毛がふんわり外へ　金沢市　竹内　一二

愛用の将棋の駒を乾拭きす自分の心磨くつもりで　箕面市　手島　愛雄

ホルモンを摘み熱燗流し込みやをら繰り出す秩父夜祭　富士見市　阿部　泰夫

俳　万智　選

間違って貼った切手を封筒に気付かれぬようゆっくり剝がす　松原市　たろりずむ

【評】破れぬよう、跡が残らぬよう、そーっと剝がす。その動作を捉えた「封筒に気付かれぬよう」が面白い。いや、気付かれても困らないでしょ、というツッコミを待ちつつ、いかに慎重かを伝えるのだ。

観なくても平気になった連ドラのように会わない日々に馴れゆく　平塚市　小林真希子

【評】かつては日常的に会っていたこと、いなければいないで意外と大丈夫なこと。連ドラの比喩が、過不足なく伝えてくれる。

優しさは伝染するということに立ち会っている急行列車　越谷市　鳥原　さみ

【評】親切が連鎖する場面。美しいできごとの証人のような「立ち会う」という動詞がいい。それを心に刻もうという気持ちだろう。

鍵盤をていねいに拭く大掃除いちばん高き音鳴り終はる　村上市　鈴木　正芳

きみがまだ記憶できないきょうをまた未熟な母のままですごした　朝霞市　桐島　あお

足弱き君には秋が足りないと友は車で里山に誘ふ　豊橋市　鈴木　昌宏

コーヒーを入れましょうかと寒い朝先に言葉で温められる　横浜市　樋口　なお

真白なる山茶花なりの言の葉があると思えりポストの傍　柏　市　塩田　淳文

この秋のコーラスとしてコスモスは歌ひ尽くしてかれてゆきたり　千葉市　小金森まき

案内鳥（あないどり）ツツツツツツとわが前を歩きてちちち飛びたちにけり　市原市　井原　茂明

黒瀬　珂瀾　選

「リンダリンダ」のリズムで激しく混ぜてゆくメレンゲがコツの可愛いケーキ　東京都　渡辺　貴子

【評】ケーキを作るため、激しい勢いで卵白を混ぜてゆく。かわいい外見の存在こそ、その内面に激しい感情を秘めているのかも。

優しさに隠れし夫の束縛に気づけばわれは八十路のおうな　横浜市　皆上　洋子

【評】いつも夫に優しく守られてきたと思っていた。しかし、いま思えば自分は、夫の都合のいい存在にされていただけではなかったか。夫婦の時間とは何だったのかを問う。

病む友が笑顔で参加の忘年会あえて写真は撮らないでおく　札幌市　多米　淳

【評】病気のためにかなり痩せられたご友人。あえて今の姿は残さず、笑顔の記憶だけを記念とする。良きひとときだったのでしょう。

ののさまの歌を大きく唱和して僧を笑ましむ山茶花の辻　京都市　根来美知代

わが家でもマスク姿で生活すうつす相手もいないというに　大阪市　黒田　道子

チリトリをふわりとかわすわたぼこりいくらかあったこんな失恋　東京都　式守　操

荒れくるう枯木灘へと来てみれば風が波喰い波が風喰う　東大阪市　池中　健一

冬至湯の柚子に囲まれチャプチャプとてまりつきをり一人良寛　枚方市　鍵山奈美江

よろこびは架空に根差すほどふかくクリスマスツリーぐんぐん伸びる　加古川市　石村　まい

生け垣に聖夜の飾り設えるじいじとばあばの年中行事　横浜市　井上　誠一

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はみそ